

主イエスの前に一人の人が登場しました。「みこころでしたら、きよめていただけるのですが」(2節)と遠慮がちに、その全身を主イエスの前にさらけ出しました。

この日、主イエスは山の上で本当の幸せについてお話しになりました。弟子たちも大勢の群衆も、食い入るように主イエスの言葉を聞き続けました。そして、主イエスの言葉に特別な力があることに驚きながら、山を降りてきました。

私たちもこの礼拝を終えて、聖堂を後にするたびに、同じことを体験しています。神を信じ、主イエスの約束を信じて生き始める場所から山を降りたところに、私たちの日常があるからです。罪に満ち、不信仰な思いにあふれ、神から引き離そうとする力が私たちに向かって殺到してきます。しかしこの日、山を降りた主イエスは、山の上で語られた言葉が、ただの言葉ではなく私たちを神に結び付ける力があることを、はっきりとお示し下さいました。主イエスの言葉に、世界全体を根底から変えてしまう力があることをお見せになりました。

この日、私たち全ての者を代表するかのようになり、重い皮膚病を患った人が主イエスの前に立ちました。当時、人間の知恵と力ではどうしようもない病気は、罪の結果、あるいは悪霊の仕業だと考えられ、差別され、人々から忌み嫌われていました。普通の生活を送ることができず、共同体から排除されていました。特に重い皮膚病は、神によって裁かれた結果だと考えられました。病気が治っても、神殿で犠牲を捧げ、祭司によって《きよい》と宣言されなければ、社会復帰することは許されなかったのです。

この日、この病人は常識を破って、主イエスの前に進み出て、神を拝むようにひれ伏しました。どうしてもこのお方の前に全身全霊を投げ出さないではいられなかったのです。ただ絶望の淵から叫ぶようにして身を投げ出しました。山から響くよう語られた神の御心を私に向けて下さるなら、この身にあり得ないことが起こる、とこの人は主イエスへの信仰を告白しました。

当時のユダヤ人にとって、《汚れ》と《きよめ》ということは決定的な意味を持ちました。これが神との関係を表す言葉だからです。神に造られ、神の祝福を受けた人間はきよい存在でした。ところが天地創造の直後から、人間は神の前に立つ資格を失い、汚れた者となりました。神と

の関係が破綻し、神の前に立つことができなくなりました。旧約聖書の律法は、この破綻を回復する手段として《あがないの犠牲》を捧げるように定めています。神の前にきよい者とされるために、人々は、小羊のような動物の犠牲を捧げて神の赦しを祈り求めました。

主イエスは、誰も手を触れようとはしないこの人に向かって「手を伸ばして、彼にさわり」(3節)語りかけられました。遠く離れた所から病気を治すことができた主イエスが、大勢の人々が見る中で、わざわざ手を伸ばしてさわられたのです。「そうしてあげよう、きよくなれ」(3節)。主イエスには、神の前にきよい者として立ちたいというこの人の願いを叶える力がありました。そしてその力を、わざわざ目に見えるように発揮して下さいました。

私たちの誰も、自分の力で神との関係を回復して、神の赦しを獲得することなどできません。私たち罪人は、神に捨てられ、滅び去る他ないのです。しかし主イエスがそこにおられ、手を伸ばして触れて下さり、「きよくなれ」とお命じ下さる時、私たちはきよくされます。神のひとり子の力によって、汚れた者が確かにきよめられ、神の前に立つことが許されるのです。

ただ神のみこころによって、私たちはきよめられ、神の前に立つだけではなく、神に愛される子と呼ばれるまでに変えられてしまいます。私たちはこの聖堂で、この日の出来事を繰り返して味わって歩んでいます。滅びるべき者が罪を告白し、主イエスへの信仰を告白して洗礼を受ける時、人が罪からきよめられ、神の子へと変えられます。この恵みを繰り返し味わう主の食卓を囲むたびに、ただ神のあわれみによって、死と滅びから解放され、神の子と呼ばれるようになった幸いを噛みしめて歩んでいます。

代々のキリスト者、信仰の先輩たちは皆、罪の赦しときよめとを味わいながら、終わりの日、神の前に立つ日を心待ちにしながら歩み、死の眠りにつきました。私たちは知っています。彼らは、主イエスに触れられ、死の病いを癒され、きよめられ、永遠の命を与えられたのです。やがて世の終わりを迎える日、私たちは彼らと再会します。御子にきよめられたことを喜び、共に神をほめたたえるのです。確かに、主イエスには私たちをきよめる力があるからです。

(記 岡村 恒)